

# 用言連用形から見た樋口一葉小説作品

田貝 和子

## 1. はじめに

樋口一葉は、明治5(1872)年に生まれ、明治29(1896)年に24歳で夭折した女流作家である。一葉が小説を執筆した明治20年代は、二葉亭四迷、山田美妙などによる言文一致体小説が注目された時期である。また、女性が職業として小説を書き始めた最初の時期でもある。このような近代小説が発生し確立していく中の、明治25年から明治29年というわずか4、5年の間に、22作品もの小説を発表した樋口一葉に注目し、その文章の変化を近代文章成立期の一部として位置づけた。

樋口一葉の国語学的観点からの研究としては、日記を中心とした岡本勲の研究<sup>1)</sup>、雅俗折衷体としての木坂基の研究<sup>2)</sup>、統計調査の土屋信一の研究<sup>3)</sup>などが挙げられる。しかし、一葉の全小説作品について、変化の過程を考察したものは、管見では見当たらない。そこで、先行研究を踏まえた上で、一葉の全小説作品を調査する。

## 2. 明治期女流作家としての一葉の文章

樋口一葉の小説作品は、擬古文であるが、一般に雅俗折衷体と呼ばれている。飛田良文は『日本語学研究事典』(明治書

院)「近代の文章」の中で「雅俗折衷体は一葉を最後に姿を消した」と述べている。

山本正秀(1965)の区分において、一葉は「停滞期」に位置づけられている。言文一致運動を推し進めた二葉亭四迷や山田美妙を考えれば「停滞」であるかもしれないが、言文一致を積極的に試みるということをしなかった作家に注目すると、変化は見えて取れるのである。同時代の女流作家の調査では、明治20年から明治40年までの期間を三期に分類することができる<sup>4)</sup>。便宜的にA期、B期、C期とする。拙稿(2006)での調査では、地の文文末のみの調査であったが、ざっと作品をみただけでも、A期は地の文、会話文ともに文語文の時期、B期は地の文は文語文、会話文は口語文の時期、そして、C期は地の文、会話文ともに口語文の時期ということが明らかである。

樋口一葉の作品は、B期にあたり、作品により差はあるが、おおむね地の文が文語文、会話文が口語文となっている。その中でも、拙稿(2005ab)から、「にぎりえ」前後で変化することがわかっている。文語文から口語文への移行期の作家として、一葉の小説作品を調査していく。

## 3. 調査目的、方法

本稿では、樋口一葉について、小説作

品を国語学的に調査する。具体的には、用言の中で音便化の起こりうる連用形に注目し、その使用状況から樋口一葉作品の特徴を明らかにすることを目的とする。例えば動詞連用形に接続助詞「て」の下接した「言ひて」という非音便形を用いるか、あるいは「言つて」という音便形を用いるかを一つの指標としようするものである。

テキストは初出本文とする。ただし、「たけくらべ」に関しては、『文藝倶楽部』再掲載本文を著者の最終指定本文として採用する。改進黨新聞掲載「別れ霜」は、本文部分が発見されていないため、博文館『一葉全集』による。

発表順に作品を並べると以下の通りである<sup>5)</sup>。

「闇桜」『武蔵野』第1編(明治25年3月)  
「別れ霜」『改進黨新聞』(明治25年4月)  
「たま櫓」『武蔵野』第2編(明治25年4月)  
「五月雨」『武蔵野』第3編(明治25年7月)  
「経つくえ」『甲陽新報』78号～84号  
(明治25年10月)  
「うもれ木」『都の花』第95号～第97号  
(明治25年11月～12月)  
「暁月夜」『都の花』第101号  
(明治26年2月)  
「雪の日」『文学界』第3号(明治26年3月)  
「琴の音」『文学界』第12号  
(明治26年12月)  
「花ごもり」『文学界』第14号～第16号  
(明治27年2月～3月)  
「やみ夜」『文学界』第19号～第23号  
(明治27年7月～11月)  
「大つごもり」『文学界』第24号  
(明治27年12月)  
「たけくらべ」『文学界』第25号～第37号

(明治28年1月～明治29年1月)  
再掲『文藝倶楽部』第2巻第5編

(明治29年4月)

「軒もる月」『毎日新聞』(明治28年4月)

「ゆく雲」『太陽』第1巻第5号

(明治28年5月)

「うつせみ」『読売新聞』(明治28年8月)

「にごりえ」『文藝倶楽部』第1巻第9編

(明治28年9月)

「十三夜」『文藝倶楽部』第1巻第12編

(明治28年12月)

「この子」『日本の家庭』第2号

(明治29年1月)

「わかれ道」『国民之友』第277号

(明治29年1月)

「裏紫」『新文壇』第2巻第2号

(明治29年2月) 未完

「われから」『文藝倶楽部』第2巻第6編

(明治29年5月)

「雪の日」「琴の音」「花ごもり」はルビなしのため、判断できないものもあった。例えば以下のようなものである。

腹ママのすく様なども氣の【利た】もので、  
一ト口といふ宿がらで無ければ、  
(「雪の日」14下-16)<sup>6)</sup>

明治期における近代文章成立過程を明らかにするために、音便形の調査は有効である。土屋(1989)では、

音便は話し言葉の中で発生したもので、イ音便は平安時代初めに、ウ音便は少し遅れて平安中期に発生したとされる。また撥音便も平安初期に、促音便も中期には発生したと言われる

とある。「話し言葉の中で発生した」音便が、書きことばの小説の中で使用される

ということは、文語文から口語文へ変化する過程の一つの指標と考える。また、平安時代の文章を志向した擬古文からの脱却という意味でもある。平安時代に発生した音便形は、明治時代においても話し言葉の中で用いられていると考えられる。この音便形を用いずに「言ひけり」「言ひて」という表現を一葉はわざわざ用いていたわけであるが、「言つて」「言つた」という表現も用いるようになってくるのである。このことから、本稿では、用言の音便形について調査をする。

拙稿(2010)の調査でも、明治23年頃から明治29年頃の女流作家の小説作品は、明治23年以前では使用されなかったイ音便形、促音便形が用いられるようになるのである。

このように、樋口一葉が小説を執筆した時期は、他の女流作家の調査からも明らかであるが、文語文から口語文への過渡期にあり、注目に値する。

動詞においての音便化は、四(五)段活用<sup>7)</sup>の連用形において発生するものである。具体的には、カ・ガ・タ・ナ・バ・マ・ラ・ワ(ア)の行において、「て」や「た」を下接する際に発生する。そこで、本稿では、サ行以外の四(五)段活用の連用形に限り調査を行う<sup>7)</sup>。

なお、本稿では音便形に注目するが、用言だけに限り、助動詞は調査対象から外す。また、名詞など活用のない自立語の音便化も調査対象から外す。

また、仮名遣いに関しては考慮しない。

#### 4. 擬古的用法

用言の中で、形容動詞の音便形は用いられていない。形容動詞では、可能性と

しては、「なんめり」「なんなり」のような、連体形の撥音便等、擬古的な表現が挙げられるが、全作品とも用いられていない。

本稿では、連用形に注目し調査を行っているため、調査対象ではないが、活用語の連体形撥音便が一例ある。

持参<sup>ちさんむこ</sup>の聲<sup>こゑ</sup>もなきにはあらじ一舉<sup>きよりやう</sup> 兩<sup>りやう</sup>  
得<sup>とく</sup>とはこれ【なんめり】と思ふ心<sup>おもこころ</sup>は  
娘<sup>むすめ</sup>にも秘<sup>ひ</sup>め同氣<sup>どうき</sup>求<sup>もと</sup>むる番頭<sup>ばんとう</sup>の勘藏<sup>かんざう</sup>に  
のみ割<sup>わつ</sup>て明<sup>あ</sup>かせば

(「別れ霜」二372-4)

前後の文において、文語助動詞「じ」を用いた「あらじ」や下二段活用動詞「求むる」などを用いていることから、この文の基調は文語文であることがわかる。そのため、擬古的な「なんめり」という表現が現れたと考える。「別れ霜」は、第二作目の作品であり、擬古的な表現が多くみられるのである。

形容詞は、連用形のウ音便が挙げられる。これはイ音便や撥音便のような口語的な要素がなく、擬古的な表現と言える。また、形容詞は、ク・シク活用連体形から現代語の終止連体形へのイ音便は対象外とする。

形容詞の連用形ウ音便は、120例用いられている。地の文では54例、心中思惟では13例、会話文では53例である。

地の文では「たけくらべ」14例と「われから」35例でほとんどを占めている。

のぞけば鞍馬<sup>くらま</sup>の石燈籠<sup>いしどうろう</sup>に秋<sup>あき</sup>の袖垣<sup>そでがき</sup>  
【しをらしう】見<sup>み</sup>えて、椽先<sup>えんさき</sup>に巻<sup>ま</sup>きた  
る簾<sup>すだれ</sup>のさまも【なつかしう】、中<sup>な</sup>がら  
すの障子<sup>しょうじ</sup>のうちに<sup>いまやう</sup>は今<sup>あ</sup>様の<sup>げよう</sup>按察<sup>あぜち</sup>の後<sup>こう</sup>  
室<sup>しつ</sup>が珠数<sup>じゆず</sup>をつまぐつて、

(「たけくらべ」十二121-12)

奥様おくさまとも言はれぬ身ながら是れを  
浅あさからず【嬉うれしうて】、いつしか好このみ  
も其その様に、一つは容貌きりようのさせし業わざな  
り。（「われから」三6-5）

会話文の中では「悪う御座りました」  
と用いられているが目立つ。

左さのみ行いかず椽えん先の柱はしらのもとにびた  
りさと坐ざして、堪かん忍にんして下くだされ、私わたしが  
【悪わるう】御座ごりました、始はじめから私わたしが  
【悪わるう】御座ごりました、

（「うつけみ」四・6段-4）

会話文では、他にも

學がく校かうにては物ものも言いひましたる、顔かほも  
見みましたる、夫それだけでは面おも白しろう  
無なうて【心こころいられのするに、日ひ曜ようの  
時ときは其家そのやの前まへの川かはへ必かならず釣つりをしに  
行ゆきましたさうな、

（「われから」22-6）

のように用いられている。

動詞の連用形ウ音便は、195例用いら  
れている。地の文44例、心中思惟39例、  
会話文112例と会話文が圧倒的である。

眞まことにうけて此こ様な厄やく種しゆを女房にようばうにと  
【言いうて】下くださる方かたもある、持もたれた  
ら嬉うれしいか、【添そうたら】本望ほんもうか、夫  
れが私わたしは分わかりませぬ

（「にごりえ」六134-15）

独白体「この子」にも用いられている。

厭いやや事ことの、情なさけない身みと此このやうな事こと  
を【思おもふて】、人ひとはお目め出でたと【言  
ふて】呉くれれても私わたしは少すこしも嬉うれしいと  
は思おもはず（「この子」2-12）

地の文では「たけくらべ」12例、「われ  
から」12例とこの2作品が多く用いられ  
ている。

美登利みどり少すこし疝かんにさはりて、用ようの無なけ  
れば【摺すれ違ちがふて】も物もの【いふた】事こと

なく、途と中に逢あひたりとて挨拶あいさつなど  
思おもひもかけず、

（「たけくらべ」七110-11）

土屋(1989)に

ハ行四段活用動詞連用形のウ音便  
形（「言うて」「笑うて」の類）は、近  
世前期の上方の口頭語に目立つもの  
で、近世後期の江戸語の中にも一部  
用いられているが、東部方言では用  
いられない。

とある。「やみ夜」以降の作品に多く用い  
られていることを考えると、初期作品と  
は異なり、王朝文学作品の模倣を排除し  
た結果と見ることができる。土屋(1989)  
でも「西鶴の浮世草子や、近松の浄瑠璃  
などの言語である近世上方語から取り入  
れたものであろう」とある。

動詞と形容詞のウ音便形の使用状況  
を、地の文、心中思惟、会話文に分けて示  
すと表1のようになる。

ウ音便以外の、イ音便、促音便、撥音便  
の中でも、擬古的な表現になっているも  
のがある。完了「たり」が下接するもので  
ある。作品全体でイ音便2例、促音便18  
例、撥音便2例ある。

イ音便は「別れ霜」の会話文1例、「五  
月雨」の地の文1例である。

お前まへにも料簡れうけんあることゝやう／＼に  
言延いひのべて歸かへります迄までと頼たのんでは【置  
いたれど】マアどうしたら宜よからう  
か思案しあんして見てくだされと

（「別れ霜」三672-13）

促音便は、会話文では「うもれ木」「た  
けくらべ」「ゆく雲」「にごりえ」「十三夜」  
中に10例、心中思惟では「大つごもり」  
「にごりえ」「十三夜」中に3例、地の文で  
は「別れ霜」「たま櫛」「やみ夜」「にごり

表1 ウ音便の使用状況

| 作品名   | 動詞 ウ音便 |          |         | 形容詞 ウ音便 |          |         |
|-------|--------|----------|---------|---------|----------|---------|
|       | 地の文    | 心中<br>思惟 | 会<br>話文 | 地の文     | 心中<br>思惟 | 会<br>話文 |
| 闇桜    | 1      | 0        | 0       | 2       | 0        | 2       |
| 別れ霜   | 3      | 3        | 2       | 4       | 0        | 4       |
| たま櫛   | 1      | 0        | 0       | 0       |          |         |
| 五月雨   | 2      | 6        | 4       | 1       | 0        | 1       |
| 経つくえ  | 0      | 2        | 2       | 1       | 0        | 1       |
| うもれ木  |        | 0        |         | 0       |          |         |
| 暁月夜   | 0      | 4        | 4       | 2       | 0        | 2       |
| 雪の日   |        | 0        |         | 0       |          |         |
| 琴の音   |        | 0        |         | 0       |          |         |
| 花ごもり  | 0      | 1        | 1       | 0       |          |         |
| やみ夜   | 1      | 3        | 2       | 2       | 0        | 2       |
| 大つごもり | 2      | 11       | 6       | 3       | 1        | 2       |
| たけくらべ | 12     | 13       | 1       | 19      | 14       | 4       |
| 軒もる月  |        | 0        |         | 0       |          |         |
| ゆく雲   | 2      | 5        | 3       | 0       |          |         |
| うつせみ  | 1      | 9        | 2       | 8       | 0        | 7       |
| にぎりえ  | 2      | 34       | 27      | 10      | 1        | 9       |
| 十三夜   | 2      | 36       | 30      | 9       | 0        | 9       |
| この子   |        | 9        |         | 3       |          |         |
| わかれ道  | 3      | 6        | 2       | 2       | 0        | 0       |
| 裏紫    | 0      | 8        | 3       | 1       | 0        | 0       |
| われから  | 12     | 38       | 23      | 53      | 35       | 13      |

え」中に5例ある。

若き男は老女が陳ぶる禮よくも聞かず、何の／＼是式のこと、【有つたれば】こそ役にも【立つたれ】、無くは我れと其方様と何づれ替らぬ難義の淵、  
（「うもれ木」二10-5）

撥音便は「やみ夜」の会話文1例、「別れ霜」の地の文1例である。

形見に娘只一人親に似ぬを鬼子とよべど鶯が【産んだる】おたかとして今年二八のつぼみの花色ゆたかにして匂濃やかに  
（「別れ霜」一269-9）

岡本(1980)では、

完了の「たり」に上接するのは極めて稀である。「たり」に上接するのは「かいたる」二例と「立たる」一例である。前者は、国語教科書と云ふ他の教科書に比し、文体上、若干擬古文的要素もある文章に於てであり、後者は、近世往来物的な文体で書かれた福澤諭吉著『世界国尽』(明治二年刊)である。

即ち、完了「たる」の上接語としては、非音便形であるのが、普通文の語法である。

とある。擬古的な表現と見ることもできるが、拙稿(2010)のように、文語から口語への変化の過渡期に見られる特異な表現とも言えるが、当時の資料を読み進め検討したい。なお、この完了「たり」に上接する音便化は以下の調査対象から外す。

## 5. 調査対象語

一葉作品全体で、音便化の起こりうる四(五)段活用で接続助詞「て」や助動詞「た」が下接している語は何語あるか、ま

表2 調査対象語

| 作品名   | 対象語数<br>(%)   | 非音便形 |      |     | 音便形 |      |     |
|-------|---------------|------|------|-----|-----|------|-----|
|       |               | 地の文  | 心中思惟 | 会話文 | 地の文 | 心中思惟 | 会話文 |
| 闇桜    | 40<br>(62.5)  | 11   | 4    | 0   | 1   | 0    | 24  |
| 別れ霜   | 160<br>(36.9) | 67   | 22   | 12  | 28  | 13   | 18  |
| たま櫛   | 51<br>(19.6)  | 27   | 13   | 1   | 9   | 1    | 0   |
| 五月雨   | 60<br>(26.7)  | 27   | 7    | 10  | 5   | 0    | 11  |
| 経つくえ  | 53<br>(62.3)  | 15   | 2    | 3   | 17  | 7    | 9   |
| うもれ木  | 143<br>(46.2) | 50   | 13   | 14  | 41  | 13   | 12  |
| 暁月夜   | 153<br>(12.4) | 82   | 19   | 33  | 12  | 1    | 6   |
| 雪の日   | 23<br>( 8.7)  | 16   | 5    |     | 2   | 0    |     |
| 琴の音   | 20<br>( 5.0)  | 19   | 0    |     | 1   | 0    |     |
| 花ごもり  | 99<br>( 4.0)  | 38   | 31   | 26  | 1   | 0    | 3   |
| やみ夜   | 129<br>(10.1) | 65   | 14   | 37  | 5   | 2    | 6   |
| 大つごもり | 99<br>(38.4)  | 46   | 2    | 13  | 9   | 8    | 21  |
| たけくらべ | 316<br>(61.4) | 115  | 6    | 1   | 54  | 32   | 108 |
| 軒もる月  | 30<br>( 0.0)  | 14   | 16   |     |     |      |     |
| ゆく雲   | 93<br>(41.9)  | 44   | 1    | 9   | 13  | 1    | 25  |
| うつせみ  | 124<br>(62.9) | 27   | 7    | 2   | 15  | 13   | 50  |
| にぎりえ  | 294<br>(80.3) | 24   | 5    | 29  | 50  | 33   | 153 |
| 十三夜   | 205<br>(79.0) | 6    | 6    | 31  | 21  | 13   | 128 |
| この子   | 99<br>(89.9)  |      | 10   |     |     | 89   |     |
| わかれ道  | 121<br>(95.0) | 4    | 0    | 2   | 26  | 17   | 72  |
| 裏紫    | 37<br>(67.6)  | 2    | 7    | 3   | 5   | 8    | 12  |
| われから  | 263<br>(49.0) | 100  | 2    | 32  | 54  | 11   | 64  |

た用いられているのは音便形を取り得るにもかかわらず、非音便形であるものと、音便形となっているものを示したのが、表2である。

作品毎にまず左側に作品全体の数と音便化の割合を示し、内訳として、右側上に非音便形と音便形を分けて数を示し、右側下に、地の文、心中思惟、会話文に分けた数値を示している。「雪の日」「琴の音」「軒もる月」には会話部分がない。また、「この子」は作品全体が独白体のため、心中思惟の欄に入れた。

「大つごもり」以降の文章の変化は、先学の文学研究者の多く述べるところである。小説家として生計を立てていくことにあきらめ、商売を始めた時期の変化とも合致している。岡本勲(1984b)にも「明治二十五年暮以降、ひとたび文学から遠ざかり商業に専従した間は、このやうな中古語的な音便の用法も少しく普通文への接近をみせたが、廃業後、もとの姿に戻つて行つた」とある。表2においても「大つごもり」以降の音便形使用率が高くなっている。

「たけくらべ」以降の作品では、助詞「て」を用いて文を続けていく表現が増えていく。また、口語助動詞「た」を下接し、口語的な表現を多用するようになる。処女作「闇桜」が他の初期作品と較べて、会話文の連用形、対象語が多く用いられているのは、半井桃水の影響である。これも、先学の研究に指摘の多いところである。最後の作品「われから」において、接続助詞「て」や助動詞「た」が下接している対象語が少ないのは、擬古的な文章であるからである。これは拙稿(2005b)における結果と同様である<sup>8)</sup>。

表3 音便形の使用状況

| 作品名   | 対象語数 |     |     | 地の文 |     |     | 心中思惟 |     |     | 会話文 |     |     |
|-------|------|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|
|       | イ音便  | 促音便 | 撥音便 | イ音便 | 促音便 | 撥音便 | イ音便  | 促音便 | 撥音便 | イ音便 | 促音便 | 撥音便 |
| 闇桜    | 40   |     |     | 12  |     |     | 4    |     |     | 24  |     |     |
|       | 1    | 23  | 0   | 0   | 1   | 0   | 0    | 0   | 0   | 1   | 22  | 0   |
| 別れ霜   | 160  |     |     | 95  |     |     | 35   |     |     | 30  |     |     |
|       | 14   | 32  | 7   | 5   | 18  | 5   | 4    | 5   | 0   | 5   | 9   | 2   |
| たま櫛   | 51   |     |     | 36  |     |     | 14   |     |     | 1   |     |     |
|       | 0    | 4   | 5   | 0   | 4   | 4   | 0    | 0   | 1   | 0   | 0   | 0   |
| 五月雨   | 60   |     |     | 32  |     |     | 7    |     |     | 21  |     |     |
|       | 0    | 8   | 1   | 0   | 2   | 0   | 0    | 0   | 0   | 0   | 6   | 1   |
| 経つくえ  | 53   |     |     | 32  |     |     | 9    |     |     | 12  |     |     |
|       | 8    | 21  | 3   | 5   | 10  | 2   | 1    | 5   | 1   | 2   | 6   | 0   |
| うもれ木  | 143  |     |     | 91  |     |     | 26   |     |     | 26  |     |     |
|       | 11   | 44  | 12  | 8   | 26  | 7   | 2    | 9   | 3   | 1   | 9   | 2   |
| 暁月夜   | 153  |     |     | 94  |     |     | 20   |     |     | 39  |     |     |
|       | 3    | 11  | 5   | 0   | 7   | 5   | 1    | 0   | 0   | 2   | 4   | 0   |
| 雪の日   | 23   |     |     | 18  |     |     | 5    |     |     |     |     |     |
|       | 0    | 1   | 1   | 0   | 1   | 1   | 0    | 0   | 0   |     |     |     |
| 琴の音   | 20   |     |     | 20  |     |     | 0    |     |     |     |     |     |
|       | 1    | 0   | 0   | 1   | 0   | 0   |      |     |     |     |     |     |
| 花ごもり  | 99   |     |     | 39  |     |     | 31   |     |     | 29  |     |     |
|       | 1    | 0   | 3   | 1   | 0   | 0   | 0    | 0   | 0   | 0   | 0   | 3   |
| やみ夜   | 129  |     |     | 70  |     |     | 16   |     |     | 43  |     |     |
|       | 3    | 5   | 3   | 1   | 3   | 1   | 0    | 0   | 2   | 2   | 2   | 0   |
| 大つごもり | 99   |     |     | 55  |     |     | 10   |     |     | 34  |     |     |
|       | 11   | 17  | 5   | 5   | 1   | 1   | 0    | 2   | 3   | 6   | 14  | 1   |
| たけくらべ | 316  |     |     | 169 |     |     | 38   |     |     | 109 |     |     |
|       | 51   | 121 | 22  | 22  | 25  | 7   | 10   | 18  | 4   | 19  | 78  | 11  |
| 軒もる月  | 30   |     |     | 14  |     |     | 16   |     |     |     |     |     |
|       | 0    | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0    | 0   | 0   |     |     |     |
| ゆく雲   | 93   |     |     | 57  |     |     | 2    |     |     | 34  |     |     |
|       | 9    | 21  | 4   | 6   | 3   | 2   | 0    | 1   | 0   | 3   | 17  | 2   |
| うつせみ  | 124  |     |     | 52  |     |     | 20   |     |     | 52  |     |     |
|       | 9    | 57  | 11  | 5   | 6   | 3   | 1    | 9   | 3   | 3   | 42  | 5   |
| にぎりえ  | 294  |     |     | 74  |     |     | 38   |     |     | 182 |     |     |
|       | 41   | 169 | 24  | 14  | 27  | 7   | 7    | 25  | 1   | 20  | 117 | 16  |
| 十三夜   | 205  |     |     | 27  |     |     | 19   |     |     | 159 |     |     |
|       | 31   | 115 | 14  | 8   | 9   | 2   | 2    | 10  | 1   | 21  | 96  | 11  |
| この子   | 99   |     |     |     |     |     | 99   |     |     |     |     |     |
|       | 14   | 68  | 7   |     |     |     | 14   | 68  | 7   |     |     |     |
| わかれ道  | 121  |     |     | 30  |     |     | 17   |     |     | 74  |     |     |
|       | 17   | 85  | 9   | 7   | 14  | 2   | 1    | 14  | 1   | 9   | 57  | 6   |
| 裏紫    | 37   |     |     | 7   |     |     | 15   |     |     | 15  |     |     |
|       | 4    | 20  | 3   | 1   | 1   | 3   | 1    | 9   | 0   | 2   | 10  | 0   |
| われから  | 263  |     |     | 154 |     |     | 13   |     |     | 96  |     |     |
|       | 31   | 70  | 13  | 18  | 20  | 4   | 3    | 4   | 1   | 10  | 46  | 8   |

## 6. 音便形の使用状況

表2の対象語、つまり、接続助詞「て」や助動詞「た」が下接している、音便化が起こりうる語が何語あり、その中で音便化している語が何語であるか、また、どんな音便形なのかを示したのが表3である。左側に作品毎の数値を示し、内訳の地の文、心中思惟、会話文の数値を右側に示し、それぞれイ音便、促音便、撥音便の数を下に示した。

「別れ霜」「うもれ木」あたりの初期作品で少し用いられているのは、作品の分量によると思われる。作品が長くなればなるほど、音便形の現れる率が高くなる。

イ音便、促音便、撥音便の中では、促音便が用いられる率が高い。「にぎりえ」以降、音便化の可能性のある語の半数以上が促音便形で用いられている。会話文では、「闇桜」「経つくえ」といった初期作品でも用いられている。「たけくらべ」以降の後期作品でも促音便形の使用率は非常に高くなっている。これは、会話文という性質上当然といえば当然である。その中で、「たけくらべ」以降の作品では、心中思惟での使用率が上がっていることに注目したい。これは、心内文が地の文寄りの文から会話文寄りの文になっていくという変化と見て取れる。文語から口語への移行期において、心中思惟の変化は一つの指標となり得るのである。

て、こ ころ おほかた し か ひ しょ  
父御の心も大方は知れてあり甲斐性  
なしの我れ嫌に【なりて】縁の絶ち  
どが無さに計略三昧かかりし我等  
は (「別れ霜」四872-8)  
いつ ひきと く かんが  
何時【引取つて】呉れるだらう、考へ  
るとつく／＼奉公が嫌やに【なつ



て【お客を呼ぶに張合もない、あゝくさ／＼するとて

(「にぎりえ」五130-7)

「雪の日」「琴の音」「花ごもり」「軒もる月」では、ほとんど音便形を使用しておらず、擬古的な文章であることが読み取れる。この時期は、龍泉寺町で生活をしている時期とその前後である。作品も初期、後期と比べるとあまり筆が進んでいない。この時期に関しては、一葉自身の生活の変化が大きく関わっているように思われる。あるいは発表媒体が『文學界』であるため、擬古的な文語文で執筆したということも考えられる。

お新さま可哀しとあるは御尤、いひ譚あそぶすほどが可怪しく、左様【ありて】こそ嬉しきお心を【喜んで】居りまする、なれども田原さまが事とて彼のまゝでは置かれもすまじく

(「花ごもり」五下14-5)

## 7. 助動詞的用法の音便形

助動詞や助動詞的用法の語の中にも、音便形を用いているものがある。表3は動詞の使用状況を調査したものであるから、数値には入っていないが、いくつか見られるのである。

「ておく」「てくださる」「てくれる」等は、口語の助動詞的用法であるため、調査対象から除外したが、音便形がみられるのである。地の文でのイ音便の使用では、以下のような例がある。

口惜しき、ぢれて、ぢれて、袂の中たもと なかから記事文の【下書きしたきして置いた】大おほ半紙はんしを掴つかみ出し、ずん／＼と裂さきて紙縷こよりをよるに、

(「たけくらべ」十二122-6)

会話文の促音便では、

今までは黙いつて居だましたれど私わたしの家うちの夫婦めとさし向むかひを半日はんいち【見て下みさつたら】大底たいていが御解おりに成なりませう、物言ものふは用事ようじのある時とき慳けん貧どんに申まをしつけられるばかり (「十三夜」上40-2)

同じく会話文の撥音便では以下のような例が見られる。

嘘うそを言いへば、寐ねたつて宜いいやね、起おきて【明あけてお呉かんなさい】、傘屋かさやの吉きちだよ、己おれだよ と少し高たかく言いへば、 (「わかれ道」上102下-6)

拙稿(2011)でも取り上げたが、接続助詞「て」を介して動詞と接続する助動詞的用法は、それ自体が口語化したからこそ用いられるものであるが、音便形を用いることにより、さらに口語的要素が強くなっているのである。

## 8. おわりに

以上、音便形を使用を中心に、樋口一葉の作品を見てきた。

地の文での使用例としては、接続助詞「て」が下接する例が非常に多い。

うたはせて舞まはせて人ひとの爲せぬ事ことして見みたいと折をふし正太しょうたに【囁ささいて】聞きかせれば、【驚おどろいて】呆おおいれて己いらは嫌きらやだな。 (「たけくらべ」八114-2)  
同氣どうき求もとむる番頭ばんとうの勘藏かんざうにのみ【割わつて】明あくせば横手よこでを【拍うつて】賛成さんせいを表あらわし主従しゅじうにちやひたひそのほうはふかうし居ゐたりき、 (「別れ霜」一273-5)  
夕暮ゆふぐの店先みせさきに郵便脚夫ゆうびんが【投なげ込こんで】行きし女文字にようじの書状しよじょう一通。炬燵こたつの間の洋燈らんぷのかげに【讀よんで】、くるくと帶おびの間へ巻納まきおむれば起居たしあに心こころを配くばられて物案ものあんじなる事一通なら



ず。(「裏紫」上17-3)  
口語助動詞「た」が下接する例は少ないが、以下のような例がある。

寧<sup>いづ</sup>その腐<sup>くさ</sup>れ縮<sup>ちぢ</sup>緋<sup>ひ</sup>着<sup>き</sup>物<sup>もの</sup>で世<sup>よ</sup>を過<sup>す</sup>ごさうと思<sup>おも</sup>ふのさ。

【思<sup>おも</sup>ひ切<sup>き</sup>つた】事<sup>こと</sup>を我<sup>われ</sup>知<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>ず言<sup>い</sup>つては、と笑<sup>わら</sup>ひしが、兎<sup>う</sup>も角<sup>かく</sup>も家<sup>うち</sup>へ行<sup>ゆ</sup>かうよ、(「わかれ道」下108上-15)

「わかれ道」は音便形を多く用いている。  
お前<sup>まへ</sup>まあ先<sup>さき</sup>へお出<sup>いで</sup>よと後<sup>あと</sup>に【附<sup>つ</sup>いて】、地<sup>ち</sup>上<sup>じよう</sup>に長<sup>なが</sup>き影<sup>かげ</sup>法師<sup>ぼうし</sup>を心<sup>こころ</sup>細<sup>ほそ</sup>げに【踏<sup>ふ</sup>んで行<sup>ゆ</sup>く】、いつしか傘<sup>かさ</sup>屋<sup>や</sup>の路<sup>みち</sup>次<sup>じ</sup>を【入<sup>い</sup>つて】お京<sup>けい</sup>が例<sup>れい</sup>の窓<sup>まど</sup>下<sup>した</sup>に立<sup>た</sup>てば、(「わかれ道」下108上-18)  
会話文の中でも音便化していない例もある。

モウいひませぬ、モウいひませぬ、  
決<sup>けつ</sup>してお力<sup>りき</sup>の事<sup>こと</sup>に【つきて】此<sup>この</sup>後<sup>ご</sup>と  
やか<sup>い</sup>く言<sup>か</sup>ひませず、蔭<sup>かげ</sup>の噂<sup>うはさ</sup>しますま  
い故<sup>ゆゑ</sup>離<sup>り</sup>縁<sup>えん</sup>だけは堪<sup>かん</sup>忍<sup>にん</sup>して下<sup>くだ</sup>され、

(「にぎりえ」七140-14)

初期作品は王朝作品の模倣に始まり、江戸戯作等を取り入れながら、口語化を進めていく。生活の変化や発表媒体の変化もあり、文章が変化する。「たけくらべ」を執筆しながら、「にぎりえ」に代表される口語的作品を書き始め、最後の発表作品「われから」も、擬古的な文章に回帰するという試行錯誤が見られるものの、全体としては、時代に沿って口語的な文章へと変化していることが、明らかとなった。

#### 注

- 1) 岡本勲(1980)(1984a)(1984b)など。
- 2) 木坂基(1988)など。
- 3) 土屋信一(1989)など。

4) 拙稿(2006)での調査による。調査作品は、以下の18作品である。

中島湘烟「善惡の岐」、木村曙「婦女の鑑」「操くらべ」「わか松」、小井喜美子「星」「浴泉記」「名譽夫人」、三宅花圃「八重櫻」「歌人」「萩桔梗」、清水紫琴「したゆく水」、北田薄氷「乳母」、田澤稻舟「五大堂」、大塚楠緒子「離鴛鴦」「空薫」、田村俊子「露分衣」、瀬沼夏葉「貧しき少女」、長谷川時雨「廿八日」

5) 資料収集には主に国立国会図書館を利用した。「近代デジタルライブラリー」「国立国会図書館デジタルコレクション」「ヨミダス歴史館」「毎索」等である。「裏紫」は明治大学図書館所蔵本を使用した。

6) 引用は対象部分を【 】で括り、括弧書きで「作品名」章(漢数字)頁-行を示す。

7) 「大長刀のさやを【はずいて】」(平家物語)のような例もあるが、一葉作品には見られない。

8) 拙稿(2005b)の図Iでは、起稿から脱稿までの期間と発表時期を示している。これによると、「たけくらべ」を執筆しながら、それ以降の作品も同時進行で進めていたことがわかる。これは「われから」まで続く。つまり、文語的作品と口語的作品を同時進行で執筆していたということである。

#### 参考文献

- 石丸久(1969)「明治の文体 樋口一葉」『解釈と鑑賞』34-1  
岩見照代他編(1996)『樋口一葉事典』おうふう  
岡本勲(1980)『明治諸作家の文体』笠間書院

- 岡本勲 (1984a)「樋口一葉日記の文章」『中京大学文学部紀要』18-3・4
- 岡本勲 (1984b)「樋口一葉の生活の変化と文体の変化」『中京大学文学部紀要』19-1
- 岡本勲 (1987)「明治文語の多様性——共時相から観た歴史的継承——」『国語学』151
- 木坂基 (1988)『近代文章成立の諸相』和泉書院
- 塩田良平 (1957)「一葉作風の展開」『国文学』2-11
- 田中章夫 (1983)『東京語——その成立と展開——』明治書院
- 田中章夫 (2002)『近代日本語の語彙と語法』東京堂出版
- 土屋信一・松原京子 (1989)「樋口一葉の小説における音便形使用——雅俗折衷体の形成との関連で——」『計量国語学』17-3
- 飛田良文 (1992)『東京語成立史の研究』東京堂出版
- 飛田良文編 (2004)『国語論究11 言文一致運動』明治書院
- 飛田良文編 (2007)『日本語学研究事典』明治書院
- 山田有策 (1983)「初期一葉の文体——王朝幻想からの脱却——」『国語通信』258 筑摩書房
- 山本正秀 (1965)『近代文体発生の史的研究』岩波書店
- 和田繁二郎 (1989)『明治前期女流作品論——樋口一葉とその前後——』桜楓社
- 和田芳恵 (1969)『一葉誕生』現代書館
- 田貝和子 (2005a)「樋口一葉の文体——統計的分析から——」『東洋大学大学院紀要』41
- 田貝和子 (2005b)「樋口一葉の小説作品における時の助動詞について」『日本近代語研究4』ひつじ書房
- 田貝和子 (2006)「明治女流作家の文体——文末表現を中心に——」『文学論藻』80
- 田貝和子 (2007)「明治女流作家の文末表現——格助詞、接続助詞の使用について——」『日本語日本文学論集』笠間書院
- 田貝和子 (2010)「明治女流作家の文体——動詞音便形について——」『言語文化研究』9
- 田貝和子 (2011)「明治期小説作品の地の文について」『言語変化の分析と理論』おうふう  
(群馬工業高等専門学校)